

# 野幌森林公園エリアに係る関係構想

## 北海道百年記念施設設置時の関係構想

### ○ 北海道百年記念塔設計競技実施要領 (北海道百年記念塔建設期成会、抜粋)

#### 設計条件

#### 2 構想

この記念塔は、北海道百年を記念して建設されるものである。

したがって開発につくした人々の労苦に感謝するけいけんな心と、さらに未来に向かって輝かしい郷土を建設しようとする逞しい道民の意欲を造形的に表現するものでありたい。

なお、この塔は展望を目的とするものではないが、塔からの眺望を可能とするスペースと塔建設の主旨を象徴するものをおく記念的なスペースを設けることが望ましい。

- (1) 高さ 高さは設計地盤面より100mとする。
- (2) 仕上
- ア 外部仕上は、とくに次の点に留意されたい。
    - (ア) 耐久性のあるもの、とくに凍害に耐えうること。
    - (イ) 昼間において航空機から視認が容易な色調であること。
  - イ 内部仕上げは、自由とする。

### ○ 北海道百年記念塔について (北海道百年記念事業の記録、昭和44年3月31日、北海道)

道民の巨大なエネルギーを結集し、天をついて限りなく伸びる発展の勢いをあらわす。

その高さも北海道百年にちなんで100メートル。躍進北海道の象徴として、風雪百年のすべての先人に対する感謝と輝く未来創造の決意をこめ、道民がみんなて築く記念塔である。

## 現在の構想

### ○ ほっかいどう歴史・文化・自然「体感」交流空間構想 (平成30年12月、北海道環境生活部、抜粋)

#### このエリアがめざす姿

大都市近郊に残された野幌森林公園の豊かな自然環境をフィールドに、北海道博物館や北海道開拓の村が伝える「歴史・文化・自然」等の各施設が持つ強みを活かし、隣接する他の施設や教育機関等と一体となって、「学ぶ」、「触れる」、「集う」、「繋がる」をキーワードに、異なる世代、様々な国や民族、障がいの有無などに関わらず、訪れる利用者のすべてが、北海道の歴史や文化、自然を五感で「体感」し、交流できる賑わいのある持続可能な空間をめざします。

#### 【キーワード】

- 学ぶ、触れる、集う、繋がる
- 大都市近郊に残された自然豊かな環境がフィールド
  - 北海道の歴史・文化・自然を五感で体感できる中核的エリア
  - 国内外からも大勢の人が訪れる賑わいのある空間へ

#### 北海道百年記念塔・塔前広場

#### 〈50年後のめざす姿〉

この広場は、道民のみならず、国内外からも数多くの方々が訪れ、家族や仲間と楽しむ交流空間となっています。

広場の中心にあるモニュメントは、はるか太古から連綿と続く北海道の歴史・文化と、今日の北海道を築き上げてきた幾多の先人の思いを引き継ぐとともに、お互いの多様性を認め合う共生の立場で、未来志向に立った将来の北海道を象徴する役割を担っています。

また、大地の手広場には、人と人のつながり、絆を大切にしようという建造の精神が引き継がれています。

周辺広場は、利用者が犬を引き連れるなど自由に散策することが可能な一方で、友人や仲間たちとバーベキューやボール遊びを楽しむなど、周囲の自然豊かな森林を背景に、安全で心安らく憩いの場としての役割も果たしています。

# 野幌森林公園エリアに係る関係構想

- 北海道百年記念地区基本計画の研究  
(昭和41年10月、東京大学工学部都市工学科 高山英華、抜粋)

## 第3章 記念地区利用構想

### 2. 計画課題

#### (1) 記念塔の外部空間構成

最大の課題は、高さ100mの場合も予想される記念塔、この大モニュメントの外部空間の構成である。(略)

さて、建築は、その高さ(H)の約2倍(2H)の距離まで離れなければ、建築を全体としてみることができないとされている。すなわち、視覚 $\theta$ は、 $\tan\theta = 1/2$ 、 $\theta = 27^\circ$ である。この見解は、ドイツの建築家メルテンス(H. Märtens)の研究にもとづくもので、広く支持されている説であるが、人間が正面を見る際、2:1の割合で眼から上部と下部とをみるとすると、眼から上部は $40^\circ$ の仰角となり建物の上部に天空をみる度合を考慮に入れれば、水平距離(D)、建築の高さ(H)のとき、 $D/H = 2$ 、仰角 $27^\circ$ で建築を全体としてみることができるといえる。さらに、個の建築としてでなく、周辺をある程度含めた建築群の中の建築体とみる場合には、3H離れること、つまり視覚 $18^\circ$ 程度がよいとされている(芦原義信:「外部空間の構成」)。

この説は、配置計画の空間分析に役立たせることができるものであるが、これによって、記念塔全面の空間構成を考えてみると、塔前面に最小限度200mの長さの広場、できれば300m以上の広場を要することとなる。(略) 入口から塔まで450mほど平坦な空間があり、前述の2Hまたは3Hの前面広場は、十分に確保できる。

#### (2) 開拓記念館の位置

(略) 開拓記念館には、記念塔ほどではないが、それに準じた記念性が要求される点を重視すると、横軸並列型がもっとも適当と考えられる。(略)

開拓記念館の位置の決定に伴って、将来計画される部門別博物館および野外博物館などのスペースは、おのずから、開拓記念館の南方に隣接する丘陵部に点在させることとなる。また「明治村」類似の野外博物館の位置は、道原案の記念塔背後地よりも、このスペースの方へ移すことが適当である。「明治村」が野外博物館の一つであるというグルーピングの必要もあるが、記念塔背後地のような地形が平坦な場所よりもこのスペースのように地形が変化に富んでいる場所が、魅力を増加するという理由によるものである。

## 第4章 記念地区利用計画

### 4. 記念塔の配置

記念塔の前面広場は、巾員100mとした。札幌市の大通とほぼ同一の巾員である。また、塔の周囲には、1辺120m弱の六角形広場(前面広場方向の巾員は200m)を設けた。六角形を選定したのは、塔のデザインの方向性に対し、自由度を与えたこともあるが、雪の結晶形を意識したものである。

## 位置図

- 北海道百年記念施設の軸を定めた配置計画(一軸構造)

